## 3. 予防的な指導援助の経過

ここでは特に，表5に示した13名の児童について3つに大別して述べてみる。

(1) 潜在的不登校傾向の強い児童への指導（予知チェック 20点以上）

○ 児童との信頼関係をつくる。

○ 良さを見つけほめてやり，自信をもって行動できるようにする。

○ 相談日を設け，児童の考えを聴く。

(2) 周辺児，孤立児への指導（ソシオメトリックテスト下位集団 0）

○ 休み時間や下校時等の行動から人間関係を把握する。

○ 共にいる時間を作り，声をかけ自己存在感をもたせる。

○ これらの児童の良さを学級全体に理解させ，認められるようにする。

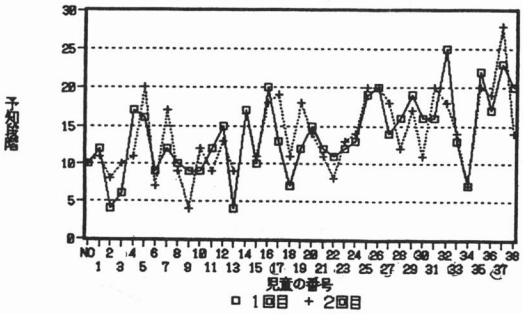
(3) 情緒不安定型の児童への指導（Y－G性格検査E型系）

○ 集団生活の良さ，きまりの理解。

○ 家庭の協力依頼。

これらの指導の後，第2回の予知段階チェックリストを実施し，1回目と比較した。個別的に指導した児童の中には改善された者も見られた。No.4，No.17，No.27，No.37等

表6 個人別予知段階チェックリスト 1回目と2回目の比較




## 4. 予防的指導援助による変容

(1) 児童の変容

○ 周辺児や孤立児の集団への参加が見られ，遊び仲間がふえた。

○ 協力し合う姿や認め合う姿が多くなったが，まだ，短絡的な理由で友だちを選択，排斥する傾向が残っている。

(2) 教師の変容

○ 児童を多面的に良いところを見て接するようになった。

○ 叱る，注意することより，認める，ほめることがふえた。

○ 教えるから共に学ぼうとする気持ちが強くなった。

(3) 親の変容

○ 親子の会話が多くなり，買い物や家事など共にするようになった。

○ 親の指示，命令が減り，子どもの考えを聴くようになった。

○ 行動の背景を考えるようになった。

## 5. まとめ

○ 潜在的不登校児はどの学級にもいるということから，教師は経験や知識にのみ頼ることなく，児童生徒の言動を見極めた指導をしなければならない。

○ 予防的な指導援助は，親や教師の考え方を変え，児童生徒の言動に余裕をもって対応できるようになった。

○ 意識した指導を学校と家庭で行えば，改善の方向へ向かうことから，教師による児童生徒や家庭への関わりが重要である。